

不浄の水がまかれた・・・

(写真集「チェルノブイリの火」より)

手記 レオニード・アントニューク (ジトーミル州消防局長・陸軍大佐)

1986年の5月は、私にとっては「重水」という記号のもとに始まった。緊張は信じがたいものだった。あのまるで夢のような現実の中から、何を見分けたら良いのか？

5月6日の朝、我々ジトーミルの者、キエフの者、そして車2台のビラ・チェクヴァの若者たちは、特別任務に再び呼び出された。

我々を出迎えた陸軍少将のソロコフは、「我々は原子炉の下から水をポンプでくみ出さなければならない」と説明した。我々は消防車の準備を始めたが、車はまるでわざとのように、2本のホースの中に水を吸い上げるのを嫌がった。幸い専門家がいて助けしてくれた。どうやらパッキンの取り付けが悪いようだった。指示に従って、川に出かけ練習した。教官が我々を見つけ、叱りつけた。私は状況に関する情報を出すよう求め、夜になってデータが届いた。行く予定の場所は、毎時70レントゲンである。原子炉の外では15mの所で1200レントゲンだ。装甲輸送車の後に従って、我々はやっと原子炉のゲートに近づき、本部のある燃料倉庫前で降りた。医師は我々に錠剤を配り、「やってのけようという気概のある者はアルコールを飲むと良い」と言った。我々は車を原子炉に進めた。最初にビル・チェクヴァの若者達が自分たちの車をホースに連結し、水は浄化施設に流れ始めた。しかし、すぐにエンストした。我々の運転士もどこかへ消えた。後で、「この時気絶した運転士は救急車が運び去った」ということが分かった。私はズボロウシキー大尉と共に、原子炉の真っ暗なトンネルを走って彼らの車にたどり着いたが、車が何故動かないのか、長い間理解できなかった。我々の順番が来た。「原子炉は水中に沈むかもしれない。そうなれば…これは水爆だ。半径300Km内で生き残るものは何もないことになる。」将官は我々にそう説明した。



私は兵士達と共に一からやり直した。車は動くようになった。しかし、まもなく加熱しエンジンが止まった。ラジエーターを冷やすため、放射能を帯びた水を破れたホースからバケツに受けた。我々は皆放射能の水を浴びた。本部に戻り、脱ぎ捨てられた服の山から、着替え用に乾いたものを線量計で測り選んだ。2レントゲンなら着て良い、5ならダメ…。

5月8日夜2時になって、やっと交代要員が到着した。我々は装甲車に乗せられ、チェルノブイリの町まで運ばれた。そこで床に倒れ込むようにして眠った。イヴァンコフではすべての病院が我々を涙で迎えた。花束は腕いっぱいになった。この後何が起こりうるのか、人々は知っていた。十分な食事とシャンパンが出された。検査も分析もされた。我々がキャンプに到着したとき、そこではすでに私は死んだものと思われていた。ジトーミルに帰り、我々の病院に1カ月、モスクワの病院に1ヶ月入院した。その後私には何も起こらない。しかし、私の健康は優れない。あの時私はちゃんと診てもらったのだろうか。あの時、私の頭にあっただのは一つの事、任務の事だけだった。火事の時と同じだ。もっと早く！もっと！これが全てだった。今それを悔やんでもしかたない。事態はいずれにせよ異常だったのだ。惨事は犠牲を要求した。そして我々は自覚してそこへ赴いたのだ。

(ウクライナ語訳 河田いこひ)